敬語における使い分けの体系とその構造的関係

——札幌における敬語調査から（5）——

荻野綱男

1. はじめに

昭和53年7月に，柴田武教授を中心とする東京大学言語学研究室の有志は，札幌で敬語に関する社会言語学的調査を行なった．この調査で得られた全データをコンピュータに入力し，筆者の開発したGLAPSというプログラムで処理し，分析を行なった．本稿の目的は，調査項目の一つ「私がやった」をとりあげ，場面（話し相手・聞き手）による敬語の使い分けを調べて，その体系と構造を明らかにすることである．

2. 調査の概要

札幌の新興高級住宅地である宮の森・円山地区内で500組の夫婦＝1000人をサンプリングで選び，面接調査を行なった．結果的には男性209人，女性294人の計503人のデータが集まった．

ここに取り上げる，D項目「私がやった」の設問は次のとおりであった．

「この仕事はだれがやったか」とたずねられて，「私がやった」と答えるとき，「私がやった」というところをどのようにいいますか．

1. 同じ年頃の親しい友人
2. あまり親しくない人で，少し年下の人
3. 親しい人で，少し年上の人
4. あまり親しくない人で，少し目上の人
5. ふだんことばづかいをいちばん気にしないで話ができる相手
6. ふだんいちばん丁寧なことばで話をする相手

以上の場面設定に関する議論などの詳細はすでに発表済みなので[1]，そちらを参照してほしい．設問で示された発話状況として「詰問された場合ではない」ということは調査票にも記され，インフォーマントが質問したら調査者が補足的に説明を加えることになっていた．これは，弁解などのニュアンスを含まない中立的な言い方をなるべく多く得ようとしたからである．

設問でシタ・シマシタを使わずヤッタを使ったのには理由がある．1年目の札幌調査[2]ではヤルを使わずにスルを用いて質問した．その結果，答としてスルが多く，ヤルがあまり出なかった．そこで，質問文でヤルを使えば，インフォーマントがそれに誘導されてヤルを使う率が高くなり，ヤルとスルの関係がつかめるのではないかと考えたのである．逆に

いえば，D項目「私がやった」でシタ・シマシタを使って答えた人は，ヤッタ・ヤリマシタを使うのをさけたわけで，ヤッタ・ヤリマシタを使わない何らかの理由があったと考えられる．

3. 自称詞の体系

上記の設問で得られた語形は，そのほとんどが自称詞部分と動詞部分とに分けられる．そこで，まず自称詞についても動詞についてもそれぞれ敬語の使い分けの体系があると考えて，両者を別々に分析し，最後に語形を前後に切らないで「私がやった」全体を見ることにする．

自称詞は男女差が大きいので，男女別に6場面での語形の出現率をグラフ化してみた．図1が男性，図2が女性である．

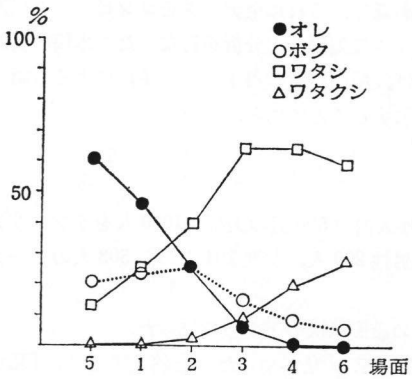

図1　男性の自称詞の場面差

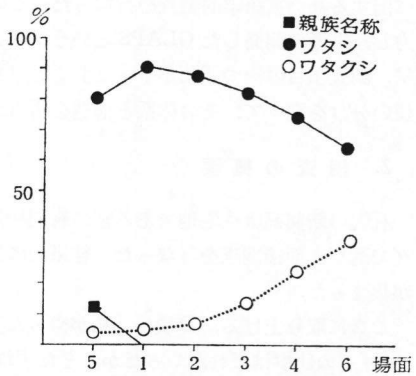

図2　女性の自称詞の場面差

男性の自称詞は主な語形が四つある．オレは右下がり型のパターンを示しぞんざいな言い方であることがわかる．ワタクシは右上がり型で丁寧な語形である．ワタシはピークがかなり右に寄った山型のパターンを示し，ワタクシについで丁寧な語形と考えられる．ボクはどの場面でも用いられるがそれほど頻度が大きくない．パターンとしてはなだらかな山型であり，ピークはやや左に寄った形をしているので，丁寧さからいうとワタシとオレの中間であると考えられる．なお，男性の自称詞としては，このほかにジブン，アタシ，ワシ，テマエ，ワガハイがあり，場面5として自分の家族などを想定した場合に，オトーサン，パパなどがある．また，オレラ，ワタシドモのような複数形も用いられたが，いずれも出現頻度が小さいので，分析の対象にはしなかった．

図2が女性の自称詞であるが，女性の自称詞としてはワタシが最も多く，丁寧な場面でワタクシがやや多く出てくるだけの非常に簡単な体系である．図2には親族名称としてまとめたが，オカーサン，ママ，オバーチャン，カーサン，オカーチャンのような語形が男性の同類語よりもずっと多く出現する．そのほかの語形としてはアタシ，アタクシ，ボク，オレなどがあるが，いずれも出現頻度が小さい．

以上の図でわかるように，自称詞部分はそれだけを取り出しても場面によることばの使

い分けがみられ，聞き手に対する敬語として「体系」を形作っていると考えられる．なお，男女をさらに他の属性によって分けて見ていくと，年齢差・学歴差・出生地差などが観察されるが，すでに述べた[1]B項目「知っている」と似た結果になるので，ここでは省略する．

4. 動詞の体系

今度は語形の後半部＝動詞部に着目してみる．語形の出現率のグラフを作るため，次のように語形を統合した．

a ヤッタ類（ヤッタ 313，ヤッタヨ 215，ヤッタノ 119，ヤッタノヨ 105，ヤッタワ 56，ヤッタンダ 52，ヤッタンダヨ 33，ヤッタワヨ 25 など．数字は 6 場面通算した出現数である．）

b ヤリマシタ類（ヤリマシタ 902，ヤリマシタヨ 40，ヤッタンデスヨ 26，ヤッタンデス 24 など．）

c シタ類（シタノヨ 100，シタノ 79，シタヨ 50，シタ 47，シタワ 27，シタワヨ 20 など．）

d シマシタ類（シマシタ 385，シマシタヨ 30，シタンデスヨ 24，シタンデスケド 14，シタンデス 14，シマシタノ 14 など．）

e イタシマシタ類（イタシマシタ 229，イタシマシタノ 65，イタシマシタケド 3 など．）

f その他（ダヨ「オレダヨなど」53，ダ 35，デス 35，ヨ（ワタシヨなど）17，ヤラシテイタダキマシタ 10，サセテイタダキマシタ 7，オコナイマシタ 4 など．）

このうち「f その他」は出現頻度が小さいためグラフによる分析では除外してある．

おもしろいことに，動詞部でも男女差が大きい．図 3（男性）と図 4（女性）を比べてほしい．男性ではヤッタ類とヤリマシタ類が飛び抜けて多く，2 段階の使い分けをしている人が多いことを物語っている．一方，女性ではヤッタ類とシタ類，ヤリマシタ類とシマシタ類が似たパターンを示し，丁寧な場面ではイタシマシタ類もかなり多く使われている．

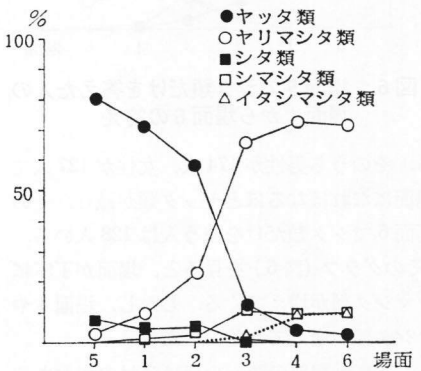

図 3 「やった」の場面差（男性）

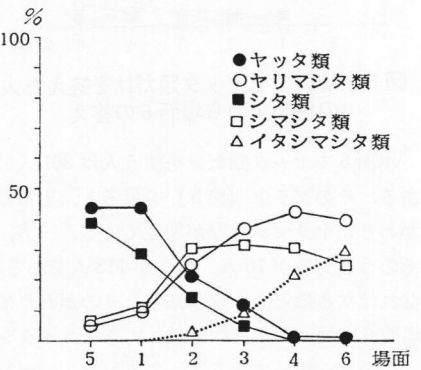

図 4 「やった」の場面差（女性）

ヤルとスルについてはヤルをスルのくだけた言い方とする見方もある[3)4)5)]．そうだとすれば

丁寧な場面ではくだけた言い方は避けられるはずであるから，図4でもヤッタ類とシタ類，ヤリマシタ類とシマシタ類で折れ線のパターンに差が出てきそうなものだが，そうではない．むしろ表面的にはヤッタ類のほうがシタ類よりも丁寧なパターンを示し，ヤリマシタ類のほうがシマシタ類よりも丁寧なパターンを示すのである．このことは図4のデータから荻野の数量化の方法[6]によって語形の丁寧さを計算することによっても確認される．すなわち，D項目の設問によって札幌の503人（のうちの女性294人）から得られた答をこのように分析する限りにおいてはヤル系列とスル系列を丁寧さのちがいとして解釈することはできないのである．

では一体，ヤル系列とスル系列はどう使われているのだろうか．図4の女性の図をよく見ると，ヤリマシタ類のピークはかなり右にずれているが，シマシタ類のピークはそれよりも左のほうにあり，シマシタ類を使う人の一部が丁寧な場面でイタシマシタ類を使うように見える．

これを確認するためには，場面5でヤッタ類だけを使う人を取り出して，その人の場面1から場面6の答えのパターンを調べ，同じことを場面5でシタ類だけ使う人について調べればよい．これを図5と図6に示した．ただし図5と図6は男女をいっしょにして図示してある．

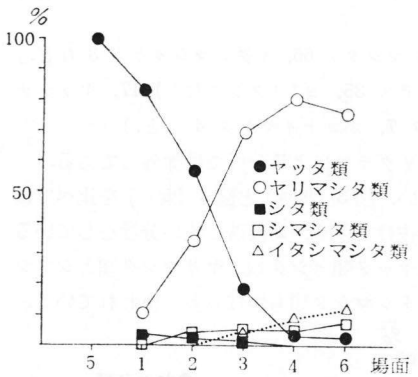

図5　場面5でヤッタ類だけを答えた人の場面1から場面6の答え

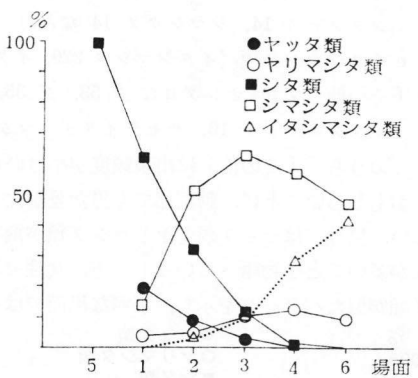

図6　場面5でシタ類だけを答えた人の場面1から場面6の答え

場面5でヤッタ類だけを使う人は301人いる．そのうち男性が174人，女性が127人である．そのグラフ（図5）を見ると，丁寧な場面になればなるほどヤッタ類が減り，そのかわりにヤリマシタ類が増えてくる．一方，場面5でシタ類だけを使う人は128人いる．そのうち男性が15人，女性が113人である．そのグラフ（図6）を見ると，場面が丁寧になればなるほどシタ類が減り，そのかわりにシマシタ類が増えてくる．しかし，場面4や場面6ではシマシタ類が減ってきて，イタシマシタ類が増えてくるのである．

このように見てくると，各インフォーマントごとに動詞部の語形の使い分けの型があるということが考えられる．それは次のようなものである．

1) ぞんざいな場面でヤッタ類，丁寧な場面でヤリマシタ類を使う，2段階の使い分け

2) ぞんざいな場面でシタ類，丁寧な場面でシマシタ類を使う，2段階の使い分け

3) ぞんざいな場面でシタ類，中間の場面でシマシタ類，最も丁寧な場面でイタシマシタ類を使う，3段階の使い分け

これらの主要パターンについで多いのは，ヤッタ類——ヤリマシタ類——イタシマシタ類の3段階の使い分けパターンである．

これらの使い分けパターンをインフォーマントごとに見ていくと，同一場面でヤル系列とスル系列を併用していたり，6場面を通して見ると両系列にまたがっていたりするケースが結構ある．それらを除いて集計すると表1のような結果になる．有効パターンの総数が339個で，503人に対して7割弱のデータしか扱っていないのだが，一応納得のいく結果が出てきたといえる．概略的には，表1の左側に示したパターンが，それぞれ表1で示されたような比率で混じりあったものが図3と図4になると考えられる．

表1 「やった」使い分けパターンの男女差

パターン＼性別	男性	女性	合計
ヤッタ ヤリマシタ	143人 88.82%	79人 44.38%	222人 65.29%
シタ シマシタ	5 3.11	42 23.60	47 13.82
ヤッタ ヤリマシタ イタシマシタ	10 6.21	19 10.67	29 8.53
シタ シマシタ イタシマシタ	3 1.86	38 21.35	41 12.06
合計	161 100.00	178 100.00	339 100.00

さて，調査票の質問文で「やった」を用いたのは，わざわざヤル系列をスル系列の語形にいいかえる人はどんな人かを調べるためであった．ここまでに見てきたことから，この問いに一応の答が出せる．「女性」である．では，特に女性の中のどんな人なのだろうか．本来ならば図4の「女性」のデータをさらに属性別に分けて図示すべきであるが，ここでは図を省略して簡単に述べよう．出生地別に見ると，札幌・北海道生まれの女性はヤル系列をスル系列にいいかえることが多い．一方，関東生まれの女性はヤッタ類——ヤリマシタ類——イタシマシタ類の3段階の使い分けパターンが多い．年齢別に見ると，高年齢の女性ほどスル系列にいいかえることが多く，若い女性はヤッタ類——ヤリマシタ類の2段階のパターンが多い．しかし，このような属性による差は男女差ほど顕著なものではない．

なお，スル系列は女性が多く使い，ヤル系列は男性が多く使うことと，一般に女性は男性よりも丁寧なことばづかいをすることの二つを結びつければ，女性が多く使うスル系列のほうが男性が多く使うヤル系列よりも丁寧だと考えることもできる．しかし，これはことばの丁寧さと男女差とを同一視する議論であって，筆者はこの見方をとらない．

5. 自称詞と動詞の関係

以上述べてきたように，自称詞についても動詞についてもそれぞれ敬語の使い分けの体系があることが明らかになった．ここでは，そのような自称詞と動詞の syntagmatic な関係について調べていくことにしよう．

表 2 男性の自称詞部と動詞部の関係

自称詞＼動詞	ヤッタ類	シタ類	ヤリマシタ類	シマシタ類	イタシマシタ類	合計
オレ	266 90.48 50.96	23 7.82 46.94	4 1.36 0.76	1 0.34 1.27	0	294 24.08
ボク	128 56.64 24.52	17 7.52 34.69	75 33.19 14.34	6 2.65 7.59	0	226 18.51
ワタシ	121 21.19 23.18	8 1.40 16.33	362 63.40 69.22	56 9.81 70.84	24 4.20 50.00	571 46.76
ワタクシ	7 5.38 1.34	1 0.77 2.04	82 63.08 15.68	16 12.31 20.25	24 18.46 50.00	130 10.65
合計	522 42.75	49 4.01	523 42.83	79 6.47	48 3.93	1221

表 3 女性の自称詞部と動詞部の関係

自称詞＼動詞	ヤッタ類	シタ類	ヤリマシタ類	シマシタ類	イタシマシタ類	合計
ワタシ	365 24.98 98.38	248 16.98 96.88	386 26.42 82.30	360 26.64 84.31	102 6.98 53.40	1 461 85.24
ワタクシ	6 2.37 1.62	8 3.16 3.13	83 32.81 17.70	67 26.48 15.69	89 35.18 46.60	235 14.76
合計	371 21.65	256 14.94	469 27.36	427 24.91	191 11.14	1 714

まず，男女別に各自称詞のあとにどんな動詞が来るかを6場面通算して集計してみる．それが表2と表3である．これらの表に示した語形の分類は図1〜図6と一致させてあり，「その他」に入るような語形は無視してある．表中の各ますの中には三つの数値が入っている．上段が出現頻度で，中段が横パーセント，下段が縦パーセントである．横パーセントの値は横方向に足していくと100になり，縦パーセントの値は縦方向に足していくと100になる．合計のところのパーセンテージは総合計（表の右下すみ）を100として計算したものである．横パーセントを見ると，各自称詞の後にどんな動詞がくるかがわかり，縦パ

ーセントを見ると，各動詞の前にどんな自称詞がくるかがわかる．

男性（表2）ではオレの後はほとんどヤッタ類である．ボクもヤッタ類が多いがヤリマシタ類もかなりある．ワタシ・ワタクシはヤリマシタ類が後続することが多い．ワタシとワタクシの横パーセントを比べるとヤッタ類とイタシマシタ類で差が出ている．

女性（表3）は自称詞（の主な語形）が2種類しかないため，男性よりも構造が簡単に見える．ワタシとワタクシの横パーセントを比べると，ヤッタ類・シタ類・イタシマシタ類で差がある．

表2・表3では出現頻度が0のますが少ないことに注意すべきである．わずかに男性のオレ——イタシマシタ類とボク——イタシマシタ類がゼロであるに過ぎない．この観点からは，自称詞と動詞とはさまざまに組み合わされて一つの文をつくるといえよう．しかし一方パーセンテージを見るとかなりの集中も目につく．男性のオレの 90% がヤッタ類である．すなわち，男性がオレ……で文を始めれば，次にはほぼヤッタ類が続くということがいえるのである．この観点からは，ぞんざいな自称詞にはぞんざいな動詞が続き，丁寧な自称詞には丁寧な動詞が続くというような規則性が重視されよう．これら二つの観点は両方とも必要なものであろう．

札幌の敬語調査では「私」と「やった」という2項目を調べたのではなく，「私がやった」という1項目を調べたという事実は重要である．すなわち，今回の調査では自称詞の体系と動詞の体系とがべつべつに抽出されても，それだけでは十分な分析とはいえないのである．

たとえば話し手の発話の心理というものを想定してみよう．ある聞き手に対して「私がやった」ということを伝えようと思ったとする．話し手は，自分自身と聞き手との種々の関係から，聞き手に対する待遇レベルはこれくらいがいいだろうと設定する（かりに，話し手が男性で，ボクガヤッタヨぐらいが適当だとする）．もし，その発話をうっかりワタシ……で始めてしまったとしたら，次に何というべきだろうか．自称詞がワタシでは丁寧すぎると考えて，動詞部にヤッタ類の中でもぞんざいなほうの，たとえばヤッタンダなどの語形を選び，発話全体の待遇レベルとしてふさわしいものにしようとするだろうか．それとも，ワタシにはヤリマシタ類が続くことが多いからという理由でヤリマシタヨを選ぶだろうか．話し手はこういう判断をごく短い時間で行なっているはずである．自称詞に何を選ぼうと，それとはまったく関係なく新たに動詞を選ぶということは考えられない．

調査では発話に際しての内面の心理まで尋ねていないから，これは想定でしかないが，このように自称詞と動詞にはいろいろな意味の「関係」があると考えられる．この関係を明らかにするためには，出現語形を自称詞部と動詞部に分けずに，全体として分析することが必要になってくる．

6. 「私がやった」全体の分析

「私がやった」の項目は自称詞部にいくつかのバラエティがあり，格助詞の有無の差もあり，それ以上に動詞部に多くの変種があるので，出現語形の異なりを6場面通してかぞえてみると 280 種にもなる．503 人の6場面の答としては多いほうである．これらを分

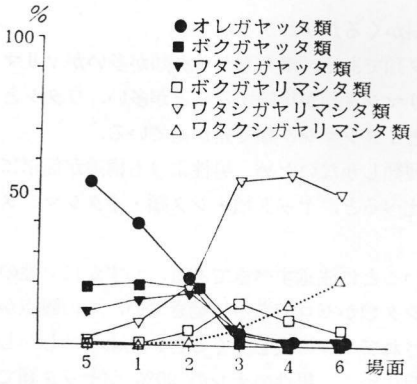

図7 「私がやった」の場面差（男性）

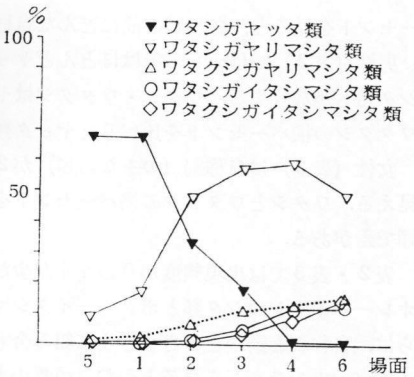

図8 「私がやった」の場面差（女性）

類・統合して各場面ごとの各語類の出現率を求め，グラフ化して示そう．語形の統合にあたっては丁寧さにおいて差の見られないヤル系列とスル系列をまとめてしまった．すなわち，シタとヤッタをまとめてヤッタ類，シマシタとヤリマシタをまとめてヤリマシタ類とした．こうして出現語形を前後に切らないで分類・統合した結果を図7（男性）と図8（女性）とに示した．いずれも主要な語類だけが図示されている．

各語類の出現パターンから，それぞれの丁寧さを計算してみよう．先に筆者の提案した数量化の方法[6]を応用すればこれが可能である．その結果を表4（男性）と表5（女性）とに示した．出現頻度の小さいものは丁寧さの値が不安定になることがあるが，ここではそれも含めて丁寧さを数量化している．

男性（表4），女性（表5）とも語類の丁寧さの順序は基本的に「動詞の順」に一致している．すなわち，

ヤッタ類——ヤリマシタ類——イタシマシタ類——ヤラシテイタダキマシタ類

である．例外としては女性のワタシガサセテモライマシタ類があるが，これは出現頻度が1しかなく，他に「サセテモライマシタ」を含む語形がないので，無視して考えてよい．自称詞と動詞の組み合わせの丁寧さの順が「動詞の順」になるということは，「語形全体の丁寧さに関与しているのは自称詞よりも動詞である」ことを意味している．

このことは，表4と表5の語類の丁寧さの部分を変形して，それぞれ表6と表7のようにすると，もっとわかりやすくなる．表6と表7の各ますを見ると，上下方向の丁寧さの差よりも左右方向の丁寧さの差のほうが大きいのである．これがすなわち「動詞のちがいは丁寧さの大きな差を生み出すが，自称詞のちがいはそれほどでもない」ということである．これは特に女性（表7）によくあてはまる．

このように，動詞が語形全体の丁寧さに強く関与しているということは，図1・図2で述べた自称詞の分析の妥当性に疑問をさしはさむことになる．なぜならば，インフォーマントは「私がやった」全体を答えたのであって，「私」を答えたのではないからである（「私がやった」の出現語形を前半と後半に切ったのは，あくまで分析者の立場である）．語形を前後に切って自称詞部を調べるということは，表6や表7で示されるような丁寧さのちが

表 4　丁寧さの数量化（男性）

語類	場面 / 丁寧さ	5 1.00	1 1.48	2 2.50	3 5.19	4 5.87	6 6.00	合計
オレガヤッタ類	1.00	122	95	55	11	3	2	288
ボクガヤッタ類	1.54	41	47	43	5	2	1	139
ワタシガヤッタ類	2.93	25	35	41	13	3	4	121
ワタクシガヤッタ類	6.46	1	0	3	1	1	1	7
オレガヤリマシタ類	7.83	1	0	0	3	0	0	4
ボクガヤリマシタ類	9.54	1	5	13	31	19	12	81
ワタシガヤリマシタ類	10.54	4	18	44	120	125	107	418
ワタクシガヤリマシタ類	11.97	1	1	3	15	32	47	99
ワタクシガイタシマシタ類	12.17	0	0	1	3	9	11	24
ワタシガイタシマシタ類	12.55	0	0	0	3	11	10	24
ワタシガヤラシテイタダキマシタ類	13.00	0	0	0	0	0	3	3
合計		196	201	203	205	205	198	1 208

表 5　丁寧さの数量化（女性）

語類	場面 / 丁寧さ	5 1.00	1 1.47	2 3.53	3 4.67	4 5.81	6 6.00	合計
オレガヤッタ類	1.00	1	1	0	0	0	0	2
ワタクシガヤッタ類	2.18	6	7	3	0	0	0	16
ボクガヤッタ類	3.03	1	1	1	0	0	0	3
ワタシガヤッタ類	3.08	207	215	106	54	4	3	589
ワタシガヤリマシタ類	9.91	30	57	149	176	182	153	747
ボクガヤリマシタ類	10.10	0	0	0	1	0	0	1
ワタシガサセテモライマシタ類	10.10	0	0	0	1	0	0	1
ワタクシガヤリマシタ類	10.86	4	8	23	34	42	49	160
ワタシガイタシマシタ類	12.34	0	1	6	17	38	41	103
ワタクシガイタシマシタ類	12.58	1	1	3	10	27	49	91
ワタシガヤラシテイタダキマシタ類	12.60	0	0	0	1	1	2	4
ワタクシガヤラシテイタダキマシタ類	13.00	0	0	0	1	5	4	10
合計		250	291	291	295	299	301	1 727

う語類を横方向に一つにまとめてしまうことである．たとえば，図1の男性のワタシという自称詞は，ワタシガヤッタ類（丁寧さ 2.93）のようなぞんざいな語類からワタシガヤリマシタ類 (10.54)，ワタシガイタシマシタ類 (12.55) のような丁寧な語類までをいっしょにしたものに等しい．このような分析は正当なものなのだろうか．

同様の疑問は動詞部についてもいえるが，動詞部に着目して語形を統合することは，自

表 6　語類の丁寧さ（男性）

自称詞＼動詞	ヤッタ類	ヤリマシタ類	イタシマシタ類	ヤラシテイタ ダキマシタ類
オレ	1.00 (288)	7.83 (4)		
ボク	1.54 (139)	9.54 (81)		
ワタシ	2.93 (121)	10.54 (418)	12.55 (24)	13.00 (3)
ワタクシ	6.46 (7)	11.97 (99)	12.17 (24)	

( ) 内は出現頻度

表 7　語類の丁寧さ（女性）

自称詞＼動詞	ヤッタ類	ヤリマシタ類	イタシマシタ類	ヤラシテイタ ダキマシタ類
オレ	1.00 (2)			
ボク	3.03 (3)	10.10 (1)		
ワタシ	3.08 (589)	9.91 (747)	12.34 (103)	12.60 (4)
ワタクシ	2.18 (16)	10.86 (160)	12.58 (91)	13.00 (10)

( ) 内は出現頻度，サセテモライマシタ類は省略してある

称詞による丁寧さのちがいが小さいため，それほど不当ではない．男性のヤッタ類でいえば，オレガヤッタ類（丁寧さ 1.00）からワタクシガヤッタ類（6.46）までであるが，ワタクシガヤッタ類は7例しかないのに対し，オレガヤッタ類は288例もある．だから，動詞部の分析（図3）のヤッタ類はオレガヤッタ類に重なる部分が多く，ボクガヤッタ類（139例）やワタシガヤッタ類（121例）にも重なるが，ワタクシガヤッタ類がヤッタ類に与える影響はきわめて小さい．つまり，男性のヤッタ類は実質上オレガヤッタ類（丁寧さ 1.00）からワタシガヤッタ類（丁寧さ 2.93）までで構成され，丁寧さの近い語形を統合したとも考えられるわけである．ヤリマシタ類やイタシマシタ類，あるいは女性の各語類についても同様である．

7.　個々の要素と全体

こうして考察を進めていくと，得られた語形を前後に切るとか，語形の一部に着目するとかいうことの意味は一体何なのか，もう一度問い直さなければならなくなる．

「語形を切る」ことで思い出されるのは言語地図やグロットグラムなどである．これらの中には語形をいくつかに切って別々に図化したものが入っていることが多い．ある部分の「音声」の研究には，この方法はたしかに有効である．しかし，形態素レベルで切ってあるのは，それだけでいいのだろうか．語形全体の図が必要なのではないか．それがなければ，contamination の現象や民間語源など，見失うものが多すぎる．インフォーマントは語形全体を一つの言い方として答えているという事実をもっと重視すべきである．語形を切るということは，6. で述べたように，本来異質なものを，ある部分を共有しているという理由だけで，一つのカテゴリーにまとめることなのである．ここでは多くのバラエテ

ィを一つにまとめることについて一般的な議論をする余裕はないが，少なくとも，異質なものの統合には十分な配慮が必要であろう．

調査時にすでに語形を前後に切ってインフォーマントに呈示し，丸をつけさせるという通信調査が行なわれることがある．こういう調査法では，語形の併用がある場合，どの前半部がどの後半部と結びついているのかわからない．語形全体の分析ははじめから考えていないようである．

言語地図やグロットグラムでは，各語形の分布が2次元平面上に示されている．本稿で見てきた2人称に対する敬語では，各語形の分布が1次元直線上に示されていると考えられる．したがって，言語地図やグロットグラムのほうが分布のパターンが複雑になり，語形全体の分析というのもむずかしくなると思われるが，けっして不可能ではない．

筆者は，語形全体を分析することこそが最終的な目的であって，個々の要素の分析はその前段階として語形全体の見通しをつけるためのものであると考える．

ここで，語形全体というのがどのくらいの長さのものを指すのかも考えておくべきであろう．本稿では2語（助詞を数えればそれ以上だが，助詞は無視している）から成る文を扱ったが，もっと長いもの，たとえば一つの発話全体のようなもの，あるいは対話全体のうちの一方の人の表出したものすべてなどを分析すべきだろうか．例として見知らぬ人との対話を想定してみよう．はじめは互いによそよそしく，丁寧な言い方をしていても，話をしているうちにだんだんうちとけてきたり，互いの年齢を知ったり，実は同郷出身だったことがわかったりして，ぞんざいなことばづかいに移行することは十分ありうることである．すなわち，長い表現連鎖を取り上げれば，その中で丁寧さが変わっていることがあるのである．したがって，分析対象は長ければ長いほどよいというものでもない．また，実際上長い連鎖は要素の数も多く，分析が著しく困難になってくる．

語形を切って考察するときには，variation が見られる限りにおいて，かなり細かく切ってもよいようである．敬語の場合，個々の音声を調べることも有用である．丁寧な発話は丁寧な発音をともなうからである．ワタシとアタシ，ワタシワとワタシャ，ソンナコトとスンナコトとンナコトなど，例はいくらでもあげられる．

これらを考慮するならば，一応，分析の単位として使い分けの見られる部分が数か所あるくらいのレベル——たいてい使い分けは形態素のレベルで見られるので，形態素数個がつながっているくらいのいわゆる「単文」程度のレベル——が効果的であると考えられる．

2人称に対する敬語を考えていく場合，一つの表現の各所に組み込まれた敬語要素（単語や形態素，音声，イントネーションなど，使い分けの体系を構成するもの）にはそれぞれ固有の丁寧さというものがあると考えられる．また，それらが現実の場面において組み合わされ連結されて一つの表現として表出されるとき，その表現全体の丁寧さというものも考えられる．今，表現全体の丁寧さを p とし，各要素の丁寧さを $p_1, p_2, \cdots\cdots p_n$ とすると，それらの関係は，

$p = p_1 + p_2 + \cdots\cdots + p_n$ （全体の丁寧さは各要素の丁寧さの和である）

あるいは，

$$p=\frac{p_1+p_2+\cdots\cdots+p_n}{n}$$　（全体の丁寧さは各要素の丁寧さの平均である）

のような単純なものではない．本稿で述べた自称詞と動詞の関係，あるいはすでに述べた動詞と終助詞の関係[6]を説明するには，少なくとも，

$$p=x_1p_1+x_2p_2+\cdots\cdots+x_np_n$$

のような係数（＝各要素の重み）x_i を仮定しなければならないし，もしかするともっと複雑な関係があるのかもしれない．各要素を個別に分析するだけでなく，それらの関係を明らかにすることが今後望まれよう．

8. ま　と　め

本稿では札幌における敬語調査から「私がやった」の項目を取り上げ，いくつかの視点から分析した．まず，自称詞部は男女で使い分けの体系が大きく異なることがわかった．次に動詞部の使い分けを調べ，①女性がヤルとスルの両系列を用いているのに対し，男性がヤルの系列を主に用いていること，②ぞんざいな場面でシタ類を使う人は丁寧な場面でシマシタ類を使うことが多く，さらに丁寧な場面でイタシマシタ類を用いて3段階の使い分けをする人もいる一方，ぞんざいな場面でヤッタ類を使う人は丁寧な場面でヤリマシタ類を使うことが多く，イタシマシタ類をあまり用いないで2段階の使い分けをする人が多いことがわかった．最後に，自称詞と動詞の syntagmatic な関係を調べ，語形全体の丁寧さに強く関与しているのは自称詞ではなく動詞であることを明らかにした．これらの分析にもとづいて，敬語表現における各敬語要素と表現全体の関係について筆者の考えを述べた．

この調査研究は，科学研究費・特定研究（1）「社会関係・場面に応じた言語行動」（研究代表者[7]・柴田武）によって行なわれた．札幌調査についてはすでに調査報告がまとめられているが，本稿の内容の一部（4. 以前）はそれと重なるところがある．

参　考　文　献

1) 尾崎秩子・御園生保子・藤田克彦・荻野綱男(1980)「話者の属性から見た敬語の使い分け――札幌における敬語調査から(1)――」国語学第120集
2) 柴田武編 (1979)『都市化と敬語』自家版，非売品
3) 見坊豪紀他 (1974)『三省堂国語辞典第二版』三省堂
4) 徳川宗賢・宮島達夫編 (1972)『類義語辞典』東京堂出版
5) 日本大辞典刊行会 (1976)『日本国語大辞典』小学館
6) 荻野綱男 (1980)「敬語における丁寧さの数量化---札幌における敬語調査から(2)――」国語学第120集
7) 柴田武監修，荻野綱男・藤田克彦・尾崎秩子・御園生保子編著(1980)『都市の敬語の社会言語学的研究――昭和53年度札幌における敬語調査報告――』自家版

――東京大学文学部助手――